



私は大阪市中央区心斎橋で「新明石」というメインは河豚の料理屋を営んでおります。私で4代目で昭和5年の創業以来続いております。

当店もかなりの数のキャンセルを受け、例年であれば必ず来て下さるお客様もこれずの状態、その結果忙しい月も閑古鳥状態でした。

毎日店に行ってもまずは店の内部に普段より目を向けて、自分で掃除できるところは全て時間がかかってもやり、業者さんの手を借りなくてはならない時は直接相談して意見を聞き、注文やこのご時世でも御来店して頂いたお客様全員に手土産と直筆で感謝のお手紙を書いたりしています。その中で「状況にあぐらをかいていたな」、という反省といかにお客様が来て下さることが決して当たり前なことではなく“有難い”という“それこそ当たり前”であるということをしひしと感じました。気持ちを冷静に構え、“人と人との思いやり”を重んじながら前進して参ります。皆様にとり安寧な日々が続きますように。



吉川 航史

(小104期・大中高47期)

vol.015 飲食店経営

私は、福島県にある福島テレビでアナウンサーをした後上京し、現在フリーアナウンサーをしています。

アナウンサーといってもその仕事内容は様々で、コロナ禍ではニュースや情報番組のリポーター達は忙しく、私が主に行っていたお店紹介の食レポ、スポーツ中継、イベントの司会は大幅に自粛中です。そんななか先日、復興庁のイベントで福島県に行きました。現在主流となっているオンラインでの配信です。

未だ震災から復興途中の福島県。その中でのコロナ禍。電車内では自主的に一席空け、スーパーではビニール手袋をしながらの買い物。高齢者が多く、大都市のように病院も少なく、より慎重さが伺えました。私が住んでいる東京。1歳の甥がいるため極力外出を控えている大阪の実家。そして福島。環境によってコロナ禍での過ごし方も様々だと感じます。福島県で感じたのは、東北の方が強い心で大震災と向き合ったように、コロナ禍でも自分ができる事、役に立つ事を見つけない。そう思いオンラインでの話し方教室を企画しています。遅い大阪魂で乗り切り、また対面できる日を楽しみにしています。



田井 麗花

(大手前中・高42期)

vol.019 アナウンサー

医師となって約三十数年多岐にわたる救急医として第一線で働いています。コロナ・パンデミックの歴史的な時代に、医者として生きているということに何か運命的なものを感じており、今回経験したコロナ感染症や勉強会で使用した資料の一部をご紹介させていただきます。

救急外来では様々な患者さんが来院され、その中で当然のことながらコロナの患者さんも隠れており、当院は第2波で患者さんからクラスターが発生しました。

病院の総力を挙げこれに対応し終息しましたが、以来救急外来入院対象患者さんには、全例コロナ検査を行っております。医療従事者はレッドゾーンで治療していても、簡単に感染することはなく、これはコロナを勉強し感染対策を工夫、消毒などを徹底しているからでしょう。

基本的にウイルスの侵入は目や鼻・口の粘膜からであり、ここを守り感染を予防、人に移さないようにすることが大切です。職場環境・設備の工夫も大切で、写真に示すようにいろんなアイデアが役立ちました。現実的ではありませんが、国民全員がN95マスクをかけ消毒を徹底すれば、感染も激減することでしょう。救急外来にはコロナ以外の未知の感染症もたくさん隠れており、ある意味、このコロナ禍で、感染防備の重要性を再認識させられました。



中川 学

(高[茨木]22期)

vol.020 救急医